

獨協医学会

会 長 寺 野 彰 (獨協医科大学学長)

運営委員会委員

平田 幸一*	奥田 泰久**	秋山 一文	石光 俊彦	植木 敬介
上田 善彦	内田 幸介	大竹 英樹	大平 修二	小端 哲二
佐々木忠昭	篠田 元扶	杉田 憲一	千種 雄一	中元 隆明
野上 謙一	簀持 淳	服部 良之	春名 眞一	深澤 一雄
本田 幹彦				

*委員長 **副委員長

Dokkyo Journal of Medical Sciences 編集委員

小端 哲二*	石光 俊彦**	上田 善彦	内田 幸介	大竹 英樹
杉田 憲一	千種 雄一	服部 良之	春名 眞一	深澤 一雄
本田 幹彦				

*委員長 **副委員長

編集事務員

鯉沼 行子

編 集 後 記

『DOKYO JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES・獨協医学雑誌』33巻第3号をお届けいたします。

本号には、原著2編、症例報告1編、および特集として「ストレスの基礎と臨床」が掲載されています。特集の「ストレス」につきましては、10有余の教室の先生方に執筆をお願い致しました。ご多忙にも係らず、執筆にご協力頂いた各先生には厚く御礼申し上げます。

「ストレス」とは、もともとは物理学の分野で使われていた用語でした。カナダの生理学者であるハンス・セリエ博士が「ストレス学説」を発表したことから、医療の分野でも使われるようになった経緯は皆様ご承知の通りです。それから70年ほど経過しました昨今では、その言葉もすっかり社会的地位を確立し、私たちが日常生活の中で「ストレス」「ストレス」と気軽に口にするような状況が生じています。また、この秋に開催されましたストレスに関するシンポジウムのポス

ターを見ますと、ストレスに心身ともに悩むのではなく、楽しむというテーマの講演もあり、最近のストレス研究の進展ぶりを実感させられます。

一方、「ストレス学説」の分子レベルでの研究がなかなか進展しなかった歴史を顧みますと、最近のストレスに関する基礎研究の発展には驚かされるものが多々あります。なかには、それら成果の応用編として、『自分が現在どれ程のストレスを受けているか、唾液に含まれる各種ホルモン濃度を測定することにより手軽にチェックできるキット』が開発されつつあり、近々市販される予定であるという話まであります。

セリエ博士による「ストレス学説」の発表以降、ストレスに関する研究がどの様に展開してきたか、そしてまた基礎と臨床にとって「ストレス」がどのように理解されているか、本号の特集が会員諸氏の「ストレス」に関する知識を整理し、理解を深める一助となることを望む次第です。(大竹英樹)

2006年10月20日印刷

第33巻 第3号

2006年10月25日発行

編集発行人

獨協医学会

寺 野 彰

発 行 所

獨協医学会

〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880番地
獨協医科大学

Tel (0282) 86-1111 (内線2009)

製 作

教 文 堂

〒162-0804 東京都新宿区中里町27

Tel (03) 3260-6136